



毎年8月1日は「高知市男女共同参画の日」

「高知市男女共同参画の日」にちなみ、男女共同参画をテーマにした川柳・写真の入賞者と、男女共同参画の推進に積極的に取り組む企業を表彰しました。



雨と共に踊る今夏のよさこい祭りでした

国内外188チーム、約1万8,000人の踊り子が演舞を披露しました。一時の雨もなんのその、老若男女・どのチームも愉快活発に踊りました。



交通安全功労者表彰式が行われました

交通安全のために積極的に取り組み、交通安全意識の高揚に貢献されたとして、個人9人と2団体が表彰されました。



くらしの中のSDGs

Vol.31

「教育」と「性の多様性」

今月のテーマ

- 4 (ゴール4) 質の高い教育をみんなに
- 5 (ゴール5) ジェンダー平等を実現しよう

質の高い教育をみんなに——これはSDGsの17のゴールの一つです。全ての子どもが平等に、安心して学ぶ機会を保障することが、このゴールの実現につながります。そして、このゴールと深く関わっているのが、もう一つのゴール「ジェンダー平等を実現しよう」です。市は令和2年度に「高知市に於けるのまち宣言」を行い、多様な性のあり方への理解を深め、誰もがお互いを認め合い、尊重し合いながら自分らしく暮らせるまちをめざしています。シンボルマークの虹は、多様性を象徴するグラデーションになぞらえて表現したものです。

こうした理念を踏まえ、市教育委員会では令和2年度から、市内の学校を対象に「レインボースクール事業」を実施しています。この事業では、市出身でトランスジェンダー当事者として啓発活動に取り組む大久保暁さんを講師に招き、「人と違っていい」「ありのままの自分でもいい」というメッセージを子どもたちに届けています。今年度で6年目を迎え、現在は18校で実施されています。「性の多様性」を理解することは、一人一人の個性を尊重し、誰もが安心して暮らせる社会を築くために欠かせません。令和5年6月には「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」も施行され、全国的にも理解促進の取り組みが広がっています。全ての人が偏見や差別を受けず、自分らしく生きられる社会をつくるためには、教育を通じた理解の広がりが大切です。子どもたちが人権に関心を持ち、多様な人との出会いを通じて「全ての人を大切にすること」を育んでいけるよう、市も引き続き取り組んでいきます。

【問い合わせ】人権・子ども支援課 ☎8553701



講演する大久保暁さん

work of kochi city 市役所の推しゴト

観光魅力創造課 編

こんな仕事をしています

- 01 観光資源の魅力向上
- 02 観光宣伝
- 03 国際・広域観光

Check! 高知の旅はデジタルマップ「高知トラベルコンパス」で 詳しくはこちら▶

まぶしい太陽、鮮やかな海、緑豊かな山々、人々の笑顔、もちろんおいしい食も。高知の魅力を余すことなく伝えます。

名産品が当たるハッシュタグキャンペーンを開催中!

高知の魅力ある観光スポットをまとめたウェブサイト「高知トラベルコンパス(KOCHI TRAVEL COMPASS)」は、県内のエリア別特集記事や、おすすめの観光スポット・観光ルートが見つかるデジタルマップです。10月26日(日)まで、高知の名産品が抽選で80人に当たるハッシュタグキャンペーンを開催中。詳しくはホームページをご覧ください。

【問い合わせ】観光魅力創造課 ☎803-4319



「もしも」のときの豆知識 06 防災ひとくちメモ

知ってる? 災害ボランティアセンター

災害発生時に、被災地でボランティア活動を円滑に進めるための拠点となる「災害ボランティアセンター」をご存じでしょうか。

市では、地震や津波、風水害等の大規模災害が発生した際に、市社会福祉協議会(市社協)に災害ボランティアセンターの設置を要請し、市社協や高知青年会議所、NPO高知市民会議等が主体となって運営します。

活動内容は、一言で言うとボランティアと被災者の「橋渡し役」です。具体的には、ボランティアの募集・受け付け・調整や被災者のニーズの把握、ボランティア活動のコーディネート、活動場所の提供・資機材の貸し出し、活動報告・情報共有などの活動があります。

大規模災害時は、地域の復旧・復興に市内外から参加されるボランティアの皆さんの協力が必要不可欠です。「災害ボランティアセンターがあるんだ」ということを知っておいてくださいね。

詳しくはこちら▶

【問い合わせ】地域コミュニティ推進課 ☎823-9080 市社会福祉協議会地域協働課 ☎823-9570



歴史万華鏡

(153回)

寺田寅彦の研究と牧野富太郎

寺田寅彦記念館友の会 宮英司

多方面に活躍したことから「日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ」と呼ばれるもいる寺田寅彦(一八七八〜一九三五年)は、研究面では日本の「X線結晶学の元祖」ともいわれる業績を残した。大正二(一九一三年)には「X線と結晶」という論文を「ネイチャー」に掲載するも、イギリスのブラッグ親子が同様の研究を同誌上で発表した直後であった。ブラッグ親子は大正四(一九一五年)に「X線による結晶構造解析に関する研究」によってノーベル物理学賞を受賞している(当時は、海外への郵送は船便であり、ずいぶん時間がかかったらしい。残念なことである)。

また、大正十二(一九二三)年の関東大震災の直後には震災の被害状況や震災火災の調査に尽力し、精力的に活動した。そして予知は難しいとの立場から警鐘を鳴らし続けている。一連の活動の中で「天災は忘れられたる頃来る」という名言が生まれたとされるのは一番弟子の中谷吉郎博士(世界初の人工雪の研究開発者)の証言によるものである。

その後は、東京帝国大学の教授となり、実験物理学や地球物理学の講座を担当した。また地震研究所や航空研究



寺田寅彦記念館入り口横の石碑(牧野富太郎 書)

所、理化学研究所等で重要な研究に携わり、若い研究者たちに多くの示唆を与え続けた。「ねえ君ふしぎだと思いませんか」は博士の口癖であったようだ。高知市の寺田寅彦記念館の入り口に牧野富太郎博士の文字が刻まれた石碑がある。「寺田寅彦先生邸址」と「天災は忘れられたる頃来る」である。昭和二十七(一九五二)年の揮毫である。寺田博士は「随筆難」という作品の中で「常山の花」と題する小品の中に「相撲取草」とは邦語の学名で何に当るかという質問を受けて困ってしまった同郷の牧野富太郎博士の教えを乞うてはじめてそれが「メヒシバ」だということを知った」という記述を残している。お互いに尊敬し合っていたとも伝えられる両者の交流が伺える一文であり、NHKの連続テレビ小説「らんまん」の中に登場してもおかしくない逸話だったかと思われる。